

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言	
法改正と看護学教育	1
保健科学研究院 研究院長補佐 良村 貞子	
学生の行方	2
保健科学院 学院長補佐 傳田 健三	
◆センター紹介	
健康イノベーションセンター	3
センター長(兼)・高度脂質分析ラボラトリー部門 教授 千葉 仁志	
ヘルスネットワークシステム部門 教授 小笠原克彦	
◆研究室紹介	
医用生体理工学分野 医用生体磁気共鳴研究室	5
医用生体理工学分野 教授 山本 徹	
◆サステナビリティ・ウィーク報告	
第3回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト報告	6
サステナビリティ・ウィーク2011ポスターコンテスト実行委員会委員・健康科学分野 教授 齋藤 健	
SW2011学生研究ポスターコンテスト受賞報告	6
看護学コース 博士後期課程2年 高島 理沙	
◆海外便り	
ポーランドでの学会発表	7
保健科学コース 修士課程2年 大坪 洋輔	
◆高校生対象体験プログラム報告	
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～	8
病態解析学分野 教授 山口 博之	
◆報告事項	9



法改正と看護学教育

保健科学研究院 研究院長補佐 良村 貞子



本保健学科の看護学専攻では、全国に先駆けて、2011年度入学生から看護師のみの養成に特化した看護基礎教育を開始しました。従来、学士課程の学生は卒業要件を満たした場合、看護師と保健師の、および選択により助産師の国家試験受験資格を得ていました。

この教育課程の変更は、2009年7月に保健師助産師看護師法(以下、保助看法)が改正され、保健師および助産師の教育年限が「1年以上」に延長されたこと、および本学の「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学重視」の基本理念のもと、いわゆる教養教育に該当する全学教育科目の卒業要件が40単位となったことが基礎となっています。この40単位は、看護師の国家試験受験資格に必要とされる13単位の3倍以上です。しかし、2008年12月、中央教育審議会の答申である「学士課程教育の構築に向けて」に示された「学士力」には、多文化・異文化に関する知識の理解や、汎用的技能としての論理的思考力および問題解決力、さらに自己管理能力や市民としての社会的責任を身につけることなどが記されています。したがって、本学における全学教育科目の40単位以上の履修は、北海道内唯一の総合大学での医療職者養成の特色を示すものであり、学生にとっては生涯の財産になるものと考えます。

また、このカリキュラム変更の主軸は、「自ら考え判断し行動できる人材」を育成するために、日々進化し高度化する医療に対応できる学習能力の獲得を目指すことにあります。今まで以上に学生の自主性を伸ばす教育が求めら

れています。

この変更に伴い、今後、本学が重点をおく大学院の修士課程で、保健師および助産師教育を行う予定です。これは、フィールド開拓も含めた、科学的根拠に基づく自立的な実践活動を担う基礎能力の獲得には、大学院での2年間の教育年限が必要と考えたためです。

折しも2011年12月、厚生労働省社会保障審議会医療部会の「医療提供体制の改革に関する意見(案)」において、保助看法を改正し、特定の医療行為を医師の包括的な指示のもと実施できる看護師を公的に認証する「看護師特定能力認証制度」が示されました。今後、国会でこの法制化が審議される予定ですが、この特定能力を獲得するためのカリキュラムおよび試験の具体的内容の検討はこれからです。現在進行中の特定看護師(仮称)養成調査試行事業の実施状況を踏まえた審議がなされる予定ですが、大学院修士課程での教育が求められる可能性が大きいと思われます。

このような変革期にある社会状況のもとで、看護学の発展に寄与できる研究者・教育者および高度看護実践者を育成する本学の役割は大きいと確信しています。患者・家族が期待する安全で安心なチーム医療を積極的に推進する看護職者には、先見性のあるリーダーシップとその専門性に基づき多職種と連携・協働関係を構築できる能力が求められています。

大きな変革の時代ではありますが、解決が困難で複雑な課題にひるむことなく、学生および教職員には、毎日基礎体力を蓄えながら歩み続けることが求められています。他の公立大学に比較し、教員数が少なすぎる現実があります。雑務が多すぎる、会議が多すぎる等のご意見ももともな部分もあると思います。しかし、限られた資源と時間という現実から目をそむけることはできません。マネジメント力を発揮して、総合大学の強みを日々の教育研究活動に生かし、国内外に発信できる教育研究成果を生み出すことに邁進していきたいと考えます。

学生の行方

保健科学院 学院長補佐 傳田 健三



平成23年度から北海道大学は新しい入試制度「総合入試」を導入した。「総合入試」では、まず文系や理系の総合入試枠で受験し、本人の希望と1年次の成績によって学部に移行するシステムである。

「総合入試案内パンフレット」によれば、これまでの、受験時に学部を選択する入試方法では、夢と希望に胸を膨らませて入学したものの、入学後に入った学部での勉強と自分の希望との違いに悩んだり、後悔したりする学生も少なくなかったという。このような学部選択のミスマッチを解消し、入学後に納得して自分の専門や所属する学部・学科を決めてもらうためにこの制度を導入したようだ。入学してからの1年間に自分が本当に学びたいことは何か、将来どのようなことをしたいのか、を十分に考えた上で学部・学科へ移行することができるのだという。

新制度の理念通りに、時間をかけてとことん考え、納得した上で学部を決めることがとてもプラスに働く学生もいることは事実であろう。しかし、「学生のモラトリアムを助長しているに過ぎない」「自分で決められない学生を大量生産する仕組みだ」という批判にも率直に耳を傾けなければならないだろう。

おりしも、「ユニクロ」は大学1年生からでも就職できるオープン採用制度の導入を決定した。大学1年から通学しながら働き、優秀な人材を育てていくという。「総合入試」の正反対の考え方である。つまり、日本の大学の人材教育（つまり人間教育）にまったく期待していないことを高らかに宣言したと言ってよい。

この「総合入試」制度を利用して医学部保健学科に移行してくる学生はごくわずかである。しかしながら、そのために1年次における専門科目授業がまったく行えなくな

り、1年次のクラスも学部・学科に無関係に組織されるため、保健学科の学生の仲間意識も希薄になってしまった。また、保健学科の先輩たちとの交流の機会も1年次においてはなくなってしまったのである。学生はいっそう孤独になっているのではないか。少なくとも、医学部保健学科がこの新しい制度によって受ける恩恵はほとんどないと言ってよい。しかし、文句ばかり言っても仕方がない。この制度が当分の間続くことは間違いないので、今後の学生の行方を考え、その対策を検討しなければならない。

2年生に進級した学生の多くは従来の学部別入試で入った人がほとんどなので、1年間に自分が本当に学びたいことを考えたわけではなく、むしろ夢と希望に胸を膨らませて入学した学生のモチベーションは削がれ、先輩との交流もないので、当初の不安を乗り越えて無気力になっているのではないか。まず、だらけた1年間の垢を落とし、目を覚まさせなければならない。これには多大な労力を要することが予想される。

医学部保健学科の4年間は短い。ほんの18歳の子どもの状態で入学した学生が、2年生から専門教育を学んで夢を発展させ、3年生からさらに実践的な実習・演習が始まり、4年生の臨床実習へ進んでいく。そして卒業研究を経て、国家試験に合格し、一人前の医療専門職者として巣立っていくのである。この間の経過は、精神発達のみると、よちよち歩きの子どものが、自分の志向性を認識し、自己主張と自己抑制を身につけ、個を確立して自立し、社会へ旅立っていくという、壮大で濃密な過程である。本来であれば長い時間をかけてさまざまな発達課題を克服していくべきであるが、これをわずか4年で行わなければならないのは過酷な道のりと言わざるを得ない。

医療職者を養成するということは、本人の意志を尊重し、じっくり時間をかけて納得して前に進んでいくという「総合入試」的な人材育成法も必要であるし、一方で、「鉄は熱いうちに打て」というユニクロ的な発想も不可欠な要素なのである。今後、専門教育が過密日程となり、学生および教員に負担がかかってくると思われるが、医療職者を養成する過程は、そのまま人間教育につながるものである。教員の方々の教育力に期待したいと思う。

健康イノベーションセンター

センター長(兼)・高度脂質分析ラボラトリー部門 教授 千葉 仁志
ヘルスネットワークシステム部門 教授 小笠原克彦

健康イノベーションセンター(Health Innovation & Technology Center, HITEC)は、健康科学研究の成果を企業等に技術移転し、産学共同開発を進め、医療・保健のイノベーションに貢献することを目的に、平成23年10月1日に保健科学研究院内に設置されました。単なる発明・開発に終わらず、社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的変化を起こすこと(イノベーション)、それがセンターの理念です。センターは高度脂質分析ラボラトリー部門(ラボ)とヘルスネットワークシステム部門からなり、受託研究費や企業との共同研究費によって支えられています。

ラボは通常の検査室・研究室では分析できない脂質を高度な技術で分析します。アルツハイマー病に関係するプラズマローゲンや、動脈硬化・炎症などに関係する過酸化脂質は微量で不安定であるために分析が難しいものです。私たちは液体クロマトグラフィー質量分析、カーボンナノチューブセンサー、モノクローナル抗体、評価のための培養実験系やモデル動物を開発して分析体制を整えました。スタッフは、文部科学省地域イノベーションクラスタープログラム(Bio-S)で雇用している恵 淑萍特任准教授(質量分析)と武田晴治特任助教(バイオセンサー)です。企業や外国の研究機関と共同研究開発を活発に進めており、研究成果は論文発表の前に特許出願しています。ラボは北大のリサーチ&ビジネス・パーク構想に組み込まれており、北海道における産学連携の発展に貢献することが期待されています。

ヘルスネットワークシステム部門は、インターネットなどICTを活用した地域医療や健康支援を目的として、遠隔健康相談システムの実用化に向けた研究に取り組んでいます。遠隔健康相談システムは、遠隔健康相談端末を設置したツルハドラッグの調剤薬局とHITEC遠隔健康相談室とを高速インターネットで接続し、看護師・保健師による健康相談を行っております。昨年3月からの今年の12月までで330件を超える健康相談があり、今年9月からは東日本大震災で被災した岩手県・宮城県のツルハドラッグ4店舗において被災された方の遠隔健康相談も行っております。研究内容も、実用可能な遠隔健康相談システムの開発と評価、遠隔で可能な健康相談の内容分析、遠隔健康相談の費用対効果などの経済性評価など幅広く行っております。スタッフは、現在、医療情報学・看護学の専門家が中心ですが、遠隔健康相談の可能性に挑戦するためメンタルヘルスや理学療法学の専門家もご参加頂く予定です。今後、更に遠隔健康相談システムを発展させた地域健康連携システムなどに挑戦し、保健科学研究院を健康情報学の世界的拠点にしたいと考えています。

研究を通じて社会や地域を変えていきたい方は、健康イノベーションセンターでその目標にしっかり取り組んでみませんか。お待ちしております。



高度脂質分析ラボラトリー部門
研究室の様子



ヘルスネットワーク部門
小笠原教授

医用生体理工学分野 医用生体磁気共鳴研究室

医用生体理工学分野 教授 山本 徹

医学と理工学の融合分野である医用生体理工学分野において、工学系(物理工学)出身の私の研究室は、MRIを用いた研究を行っています。MRIは、人を傷つけずに体内を画像化する方法として発展してきました。MRIの信号発生源分子(主に水)密度のみならず、分子の動きや周囲の分子との相互作用などを反映するので、MRIにより様々な生体情報を知ることができます。さらに、放射線を用いないので被曝の恐れがなく繰り返し検査できるという特徴ともあいまって、多くの医療検査や人を対象とした脳機能研究などに用いられています。当研究室では、MRIやMRS(磁気共鳴スペクトロスコピー)により生体中の微細構造やどのような生理活動・分子イベントが行われているかを知ることが目標に、MRI撮像法や画像解析法の開発など磁気共鳴技術(スピントクノロジー)を駆使する研究を行っています(図1)。

研究テーマは、科学的興味に従うfree research的テーマと、臨床現場のニーズなどに基づくon-demand的テーマに分類されます。free research的テーマには、脳血管機能の高感度な診断を目指す「大脳細動脈機能の画像化」や、生体の水の機能に着目した「細胞間質液動態の解析とその応用」および「細胞内水分子ネットワーク構造の研究」などがあります。生体の60~70%を占める水は単なる媒質としてしか理解されてきませんでした。水分子からの信号を画像化するMRIの登場以来、水分子の生体機能の研究が進展しつつあり(“Water: The Forgotten Biological Molecule”, Pan Stanford Publishing, 2010参照)、MRIによる生体水分子に関する研究には興味が尽きません。また、on-demand的テーマには、人工大腿骨などのインプラント周辺がMRI画像では欠損し診断できなくなる場合があるので、そのような

欠損が発生しない材料の開発研究や、脳動脈瘤クリップのMRI検査安全性に関する研究などがあり、関連企業との共同研究を進めています。その他に、MRI検査中に加える電磁波により患者が火傷する場合があります。それを防止する研究も行っています。また、機能回復学分野(宮本教授)との共同研究として口呼吸に伴う軟口蓋の動きの画像化があります。この研究

は、高速かつ高詳細で撮像しなければなりませんでしたが、大学院生にこの課題を与えたところ自らのアイデアで図2のような画像を撮像し、大学院教育により高度な知識技術が身につくことを実感しつつあります。



図1 研究室HP (<http://www.hs.hokudai.ac.jp/yamamoto/index.html>)

研究室に所属する大学院生は修士課程学生のみ5名ですが、医学研究科博士課程学生も研究活動に参加しています。研究室メンバーの内2名は異なる病院の診療放射線技師で、臨床現場情報を伝え実務に基づく研究ニーズを提供する貴重な人材です。また、保健科学院初の留学生が当研究室に在籍しておりますが、彼は、中国・電子科技大学出身で、医学・医療の基礎知識が豊富な保健学科出身の大学院生に対して、理工学的知識を支援する役目も担ってくれています。このように当研究室は、保健学系、工学系の学生に加え、現役の診療放射線技師からなり、それぞれの長所を生かし相乗的に研究が進められています。

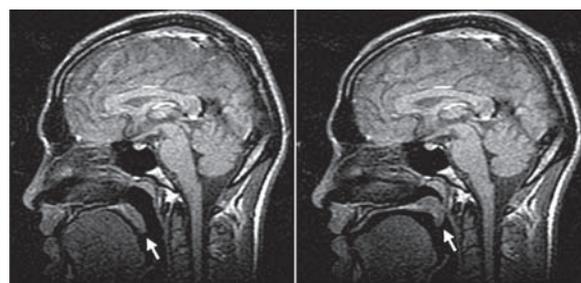


図2 口呼吸に伴う軟口蓋(矢印)の動き

第3回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト報告

サステナビリティ・ウィーク2011ポスターコンテスト実行委員会委員 健康科学分野 教授 齋藤 健

第3回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテストが、10月26日(水)と11月2日(水)の2週に分け、学術交流会館にて開催されました。本コンテストは、学生が今取り組んでいる研究を「持続可能な社会づくり」という観点から捉え直し、研究分野の異なる人に分かりやすく伝えるように推奨するものです。今年のポスターコンテストの発表は、92チーム、のべ105名と年々増加していますが、そのうち保健科学院からのポスター発表者は20名で、地球環境科学院に次いで全学で2番目に多く、コンテストの活性化に大いに貢献しています。

コンテストの日には、発表者はポスターの隣に立ち、審査員や一般参加者の前で日本語あるいは英語で口頭発表を行いました。審査員は、口頭発表を行った学生とは異なる学問分野の教員7名とポスター発表した89名の

学生が担当しました。

審査の結果、まず総長賞受賞候補者22名が選出され、その中から課題別に6名の総長賞(最優秀賞)受賞者が選出されました。保健科学院からは、博士後期課程2年 高島理沙さんがみごとに総長賞を受賞致しました。また、惜しくも受賞を逃しましたが、修士課程2年 萩野泉さん、同 桑島大輔さん、同 久保晴敬さん、および博士後期課程2年 宮島美貴さんが受賞候補者に選出され、保健科学院の研究を大いにアピールしてくれました。

来年は、異分野の研究者による協働を促す機会に加え、世界に開かれた交流プラットフォームとしての役割も担うポスターコンテストとして、さらに発展させることが企画されており、保健科学院から多くの院生がコンテストにチャレンジすることが期待されています。

SW2011学生研究ポスターコンテスト受賞報告

看護学コース 博士後期課程2年 高島 理沙

第3回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテストにおきまして、6分野ある内の「健やかに人間らしく生きる(Quality of Life)」という分野で参加しました。「The actions of occupational therapists who support clients' rehabilitation through their "occupations" — Supporting clients to live happily—」と題してポスターを作成し、リハビリテーションの一端を担う作業療法士とはどのような専門職なのかに関してプレゼンテーションを行いました。結果、昨年に引き続き北海道大学総長賞(最優秀賞)をいただくことができました。指導教員である看護学コースの佐伯先生をはじめ、研究にご協力いただいている臨床現場の作業療法士の方々には深く感謝申し上げます。

他分野の人々に自身の研究をプレゼンテーションするこのコンテストでは、自分が行っている研究を俯瞰的に見直し、専門分野内だけでなく社会全体の中での立ち位置

や意義を知る必要があります。自身の研究の新たな可能性を探索し、自分の立ち位置を明確にできたことが最優秀賞の受賞につながったと感じています。この受賞を励みに、今後も自分の研究に真摯に取り組んでいきたいと思えます。



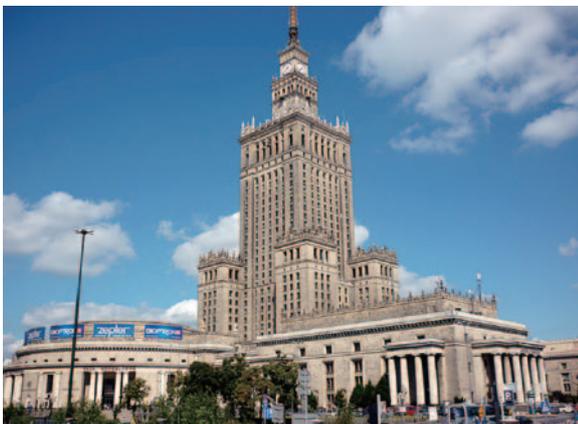
授賞式にて佐伯総長と記念撮影

ポーランドでの学会発表

保健科学コース 修士課程2年 大坪 洋輔

2011年8月27日から一週間ほど学会発表のため、ポーランドのワルシャワに行ってきました。ポーランドは、北はリトアニア、東ではベラルーシとウクライナ、南ではチェコとスロバキア、西ではドイツと接する国で、面積としては日本の5分の4程度の大きさです。ワルシャワは、第二次世界大戦の際に都市部が徹底的に破壊された歴史がありますが、旧市街や新市街と呼ばれる歴史的市街地は今も残っています。これは戦争後、ワルシャワ市民が「壁のひびの1本まで忠実に」復元したものだそうです。ワルシャワに所縁のある著名人としては、ショパンやキュリー夫人などがおり、今回参加した学会もキュリー夫人のノーベル化学賞受賞100周年の記念大会でした。開催場所は、ワルシャワの中心部にある文化科学宮殿でした。

この学会で私が発表した内容は放射線、特に光子線と呼ばれるX線や γ 線が細胞に与える影響についてです。現在のところ、どんなエネルギーの光子線であっても、細胞に与える影響は同じであるとされています。たとえば、健康診断でよく撮影される胸のレントゲン写真のX線も放射線治療で使われるX線も同じ効果を細胞に与えるということになります。もちろんX線を人体に照射する量は、圧倒的にレントゲン写真の方が少ないので、体に影響が出ることはまずあり得ません。私が発表した内容は、“同じ量”の“違うエネルギー”のX線を照射したとき、細胞に与える影響が変化するかというものです。学会では主に、放射線によって細胞に生じる傷についての発表を聞いてきました。特に発生した傷を視覚的に捉える実験方法がありますので、発生した傷の数や時間的变化、そして光子線

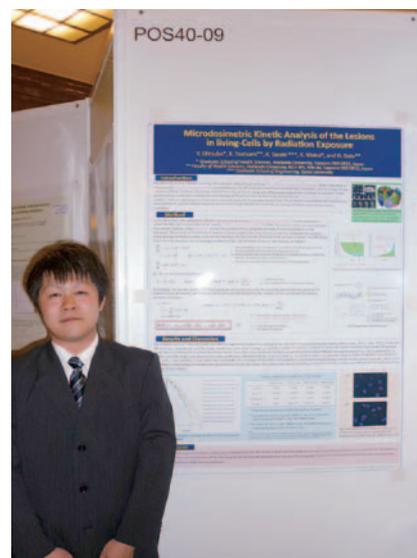


学会会場である文化科学宮殿

のエネルギーの違いによる変化など、大変勉強になる発表がありました。今回、私はポスター発表でしたので、オーラル発表よりは緊張感が少ないのでは?と思っていましたが、やはり英語での発表ということもあり、大変緊張しました。そして発表を通じて感じたことは、やはり英語の重要性でした。自分の思ったこと、言いたいことをもっと英語で話すことができれば、発表をより一層良く、楽しくできるのではと痛感しました。

学会の間には、ワルシャワを観光してきました。宿泊したホテルや学会会場、観光スポットが街の中心部にあったため、旧市街や新市街、ショパンやキュリー夫人の博物館など色々な場所に行ってきました。旧市街といった、日本の文化とはまた違うレンガ造りの建物を直接見ることができたのは貴重な体験でした。食べ物に関しては、ジャガイモや肉料理などがメインであり、ポーランドの伝統料理を注文したところ、とんかつが出されたのにはびっくりしました。

この度の学会発表が、初めて海外に行く機会となりました。行くまでは、言葉の違いなど色々な不安な要素がたくさんありましたが、あっという間に一週間は終わってしまいました。英語での会話やワルシャワの空気に触れられたことは、大変有意義な経験となりました。最後に、このような貴重な機会を設けていただいた伊達先生にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



学会会場にて

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI 「ようこそ不思議な細菌の世界へ！～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」

病態解析学分野 教授 山口 博之

12月4日(日)、高校生を対象とした日本学術振興会主催体験プログラム「ようこそ不思議な細菌の世界へ！～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」を開催しました。

科学に興味を持ちその研究領域に足を踏み入れる学生数が極めて少なくなっています。これは科学の将来にとって由々しき事態であり、抜本的な解決策を速急に見いださねばなりません。そこで、細菌学を通して科学への興味を次の世代を担う若者にぜひ持ってもらいたいという強い願いからこのプログラムを継続的に実施しており、今回で4回目の開催となりました。

当日のプログラムには高校生18名、引率者2名の参加があり大変賑やかな実習となりました。プログラムは参加者の掌や口の中に常在する細菌を培養しグラム染色を通して見てみるというものです。また参加者の疑問点や質問に対して誠意を持って対応できるように参加者3～4名ごとに大学院生や学部生(TA)を1名配置したことで、TAを

通して実験内容の細部に渡りフォローするとともに、研究室での具体的な研究活動等の話題を通して双方向型のやり取りが可能なリラックスした環境を作り、参加者と実施者との円滑なコミュニケーションが実現しました。

菌を直接顕微鏡で眺めて驚く参加者の姿を見て嬉しく思うとともに、更に感動を与えられるプログラムに進化させるための強い意欲が湧いてきたのも事実です。またOHPを用いて実験結果を参加者全員に発表してもらい、本プログラムで見たことや感じたことを整理し、疑問点について自ら踏み込んで紐解くための時間も設けました。

最後に、高校生の参加者に小林清一保健科学研究院長より「未来博士号」が授与され、プログラムを無事終了しました。

今後も、高校の先生との連携をさらに深め、高校生の積極的な参加をさらに促進し、このプログラムを継続できればと思っています。



グループに分かれた実習の様子



小林研究院長より未来博士号を手渡される参加者

報告事項

平成23年度(第1回)北海道大学医学部保健学科 卒業研究優秀賞表彰式を挙

平成24年1月26日(木), 保健学科会議室において「北海道大学医学部保健学科卒業研究優秀賞」表彰式が行われ, 保健学科の教員が列席のもと, 小林保健学科長から受賞者11名に, 賞状および記念品が贈呈されました。

この表彰は, 医学部保健学科4年次に在籍する学生で, 保健科学における新しい研究課題を積極的に開拓し, 優れた卒業研究を行った個人・グループへ授与されるものであり, 第1回となる今年度は下記の方々が表彰を受けられました。

専攻	氏名
看護学専攻	渡部 千寿瑠
	千葉 渚
	横山 冬貴
	合田 晴奈
	中嶋 祥平
放射線技術科学専攻	高野 泰輔
	里村 美奈斗
検査技術科学専攻	石部 薫
	佐藤 真美
理学療法学専攻	田中 雄也
作業療法学専攻	庄司 翼



小林保健学科長を囲んでの記念写真

受賞状況(平成23年7月～平成23年12月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
博士後期課程2年 長澤 あゆみ	第23回国際血栓止血学会 JSTH Asian-Pacific Scholarship	The significance of leukocyte-platelet aggregates formation by platelet activation
博士後期課程2年 田村 彰吾	第23回国際血栓止血学会 JSTH Asian-Pacific Scholarship	Release reaction of brain-derived neurotrophic factor (BDNF) through PAR1 activation and its two distinct pools in human platelets
博士後期課程2年 林 泰弘	第3回日本細菌学会北海道支部 会賞・優秀賞	Host range of obligate intracellular bacterium Parachlamydia acanthamoebae
修士課程2年 萩野 泉	第22回日本成長学会 若年優秀演題賞	大規模横断データによるピグミー系 狩猟採集民の成長パターン解明

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成23年7月～平成24年1月)

分野	職名	氏名	備考
健康科学	教授	千葉 仁志	3編 内1編10%以内 ※1 内1編20%以内 ※2
健康科学	教授	小笠原克彦	
医用生理工学	教授	伊達 広行	2編 内1編10%以内 ※1
病態解析学	教授	山口 博之	20%以内 ※2

【研究助成制度】

- 対象：(1) 英文原著論文(査読有, IF有, first author)を執筆した教員
 (2) 英文原著論文(査読有, IF有)のcorresponding authorとなった教員
 (ただし, (1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法:論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

- ※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分
 ※2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻 「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者の決定

平成23年12月15日(木)開催の保健科学院教授会において、平成24年度の小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻「大学院連携によるMBA特別コース」入学志願者として、下記の1名が決定しました。

所属学科目	氏名	指導教員
健康科学	石川 智基	小笠原克彦

広報室員「小野塚久夫先生」を悼む

小野塚久夫先生が、平成23年12月12日にご逝去されました。小野塚先生は、本広報室設置時点からのメンバーであり、広報誌の編集、ホームページの作成といった活動において、いつも有益なご意見を提示されるとともに信頼性の高い仕事により、多大な貢献をなされました。小野塚先生の頭脳の明晰さ聡明さが思い出されます。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

広報室長 伊達 広行

人事異動

平成23年12月12日

(死去) 小野塚久夫 病態解析学分野准教授



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

伊達 広行(広報室長)
大槻 美佳
政氏 伸夫
高橋 光彦
境 信哉
横澤 宏一
山内 太郎
渡辺 玲奈
菊池 洋美(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>